

交代寄合美濃衆高木家陣屋の建築と庭園

大橋 正浩（佐賀県立名護屋城博物館）

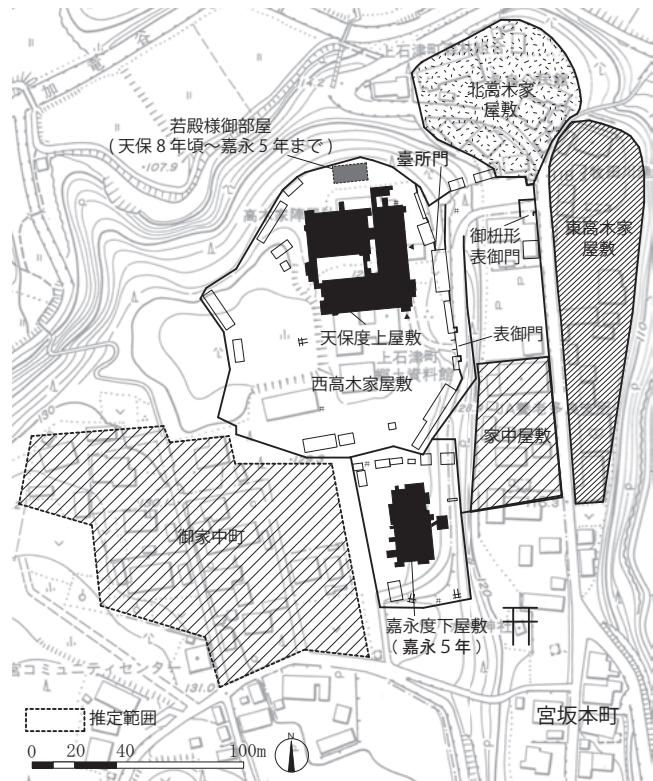
Samurai Residences and Gardens: The Case of The Takagi Family Jin'ya OHASHI Masahiro (SAGA Prefectural Nagoya Castle Museum)

1. はじめに

(1) 目的

(2) 交代寄合美濃衆高木家の沿革

(3) 陣屋の遺構



り、交通の要所を抑えていたと考えられる。陣屋の遺構としては、天保3年（1832）再建の西家の上屋敷御殿の中奥と大奥の一部、嘉永5年（1852）建造の西家の下屋敷表門、文政年間（1818-1831）の建造と伝えられる東家の上屋敷の土蔵、他には三陣屋の中心に位置する埋門および西家の陣屋の基礎となる石垣などが残る。西家の陣屋跡については平成26年に「西高木家陣屋跡」の名称で国の史跡に指定されている。

(4) 高木家文書および関連する文書群

しているものだけでも約10万点にのぼるとされ、平成26年までに約7万点が整理されている。これらは令和元年7月23日付の官報告示を経て、「交代寄合西高木家関係資料」の名称で重要文化財に指定されている。他にも大垣市教育委員会や個人などが所蔵する。東家に関する文書は、名古屋市蓬左文庫や徳川林政史研究所、個人所蔵などで約8,200点、北家に関しても個人所蔵で約3,000点にのぼるとされる。このうち、建築分野に関わる500点以上におよぶ屋敷図や作事記録などは、筆者が文書の原典を解読し分析を行い、博士論文、刊行に携わった報告書、研究報告等にまとめている²⁾。

上記の文書群のうち、本稿で取り上げるのは屋敷図および作事記録に関する文書の中でも庭園や眺望を目的とした遊興施設に関する描写や記述が多い、下記8

点である。このうち6点は西家、2点は東家に関する文書である。

1) [天保再建上屋敷図] (196cm×163cm、図2)

外題や内題、奥書、年代などの記載はないが、天保3年(1832)の火災から再建された西高木家陣屋を描くことが、筆者の既往研究から明らかになっている³⁾。天保再建上屋敷図には彩色が施され、石垣や土手に囲まれた敷地全体の様子がわかる。敷地内には建物の平面が描かれ、主屋のほかには、「表仮門」、「臺所門」、「埋門」、「中間部屋」、「薪部屋」、「番所」、「蔵」、「倉庫」、「物置」、「廐」、「雜藏」、「道具入」などの建物が確認できる。このうち、主屋には家相検討に用いたと考えられる方位が朱筆で記される。庭園については、主屋の西面と南西面に植栽や石組等が描かれる。経年の改修を示すような朱筆や貼紙はほとんど無く、



図2 天保再建上屋敷図 (右手が北)



図3 高木三館鳥瞰図（右手が北）

上屋敷再建当初の屋敷全域を記録した基本図として保管されていたとみられる。

2) 高木三館鳥瞰図⁴⁾ (図3)

高木三館鳥瞰図(以下、鳥瞰図)は、西家のみならず、東家、北家の陣屋建物の配置および構成と外観、さらには地形や街道をも比較的細密に記載した、情報量の多い史料といえる。年紀は無いが、西家の下屋敷が敷地のみで建物が無いこと、同上屋敷御殿の北側に後述する若殿様御部屋と考えられる建物があることから、鳥瞰図は天保8年(1837)から嘉永5年(1852)の間に描くと考えられる。庭の描写は、上屋敷御殿の周囲に樹木が確認できる。

3) 【屋敷図】[218-せ]【tfga-0218-014]⁵⁾

(53.5cm×64.0cm、図4)

包紙に安政4年(1858)と年紀が入り、この時期に上屋敷御殿の改修を計画していたことがわかる。屋敷図はその検討図面で、上屋敷御殿の外形腺を描く家相

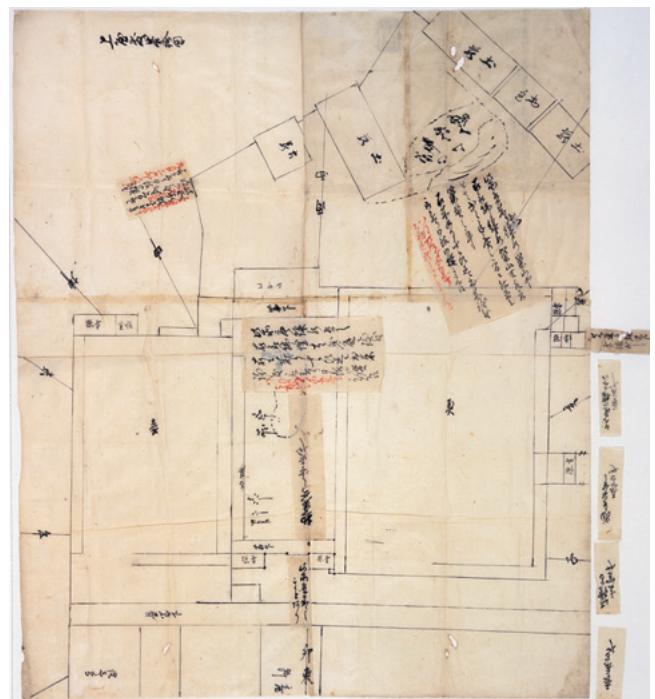


図4 【屋敷図】[218-せ] (右手が北)

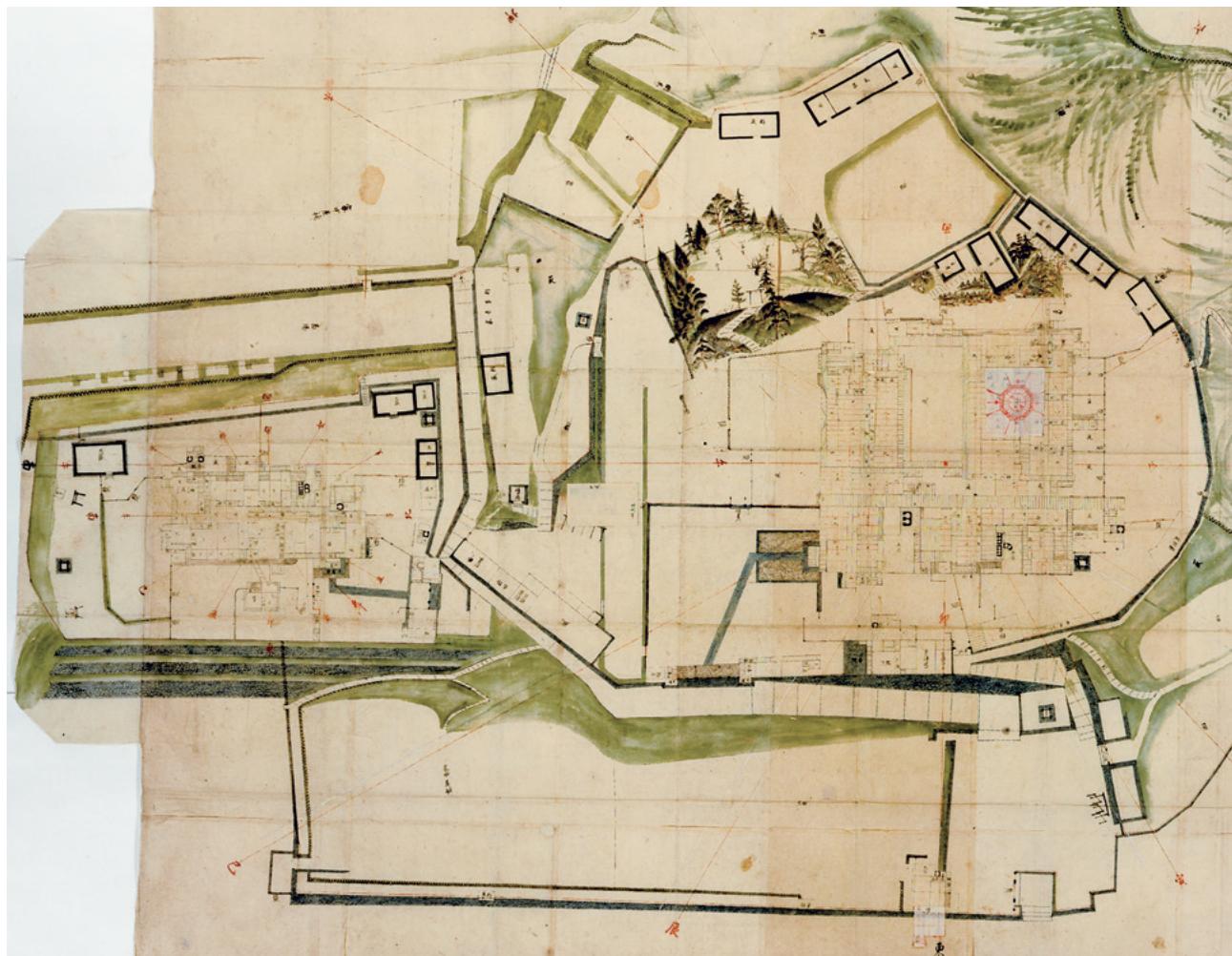


図5 安政普請屋敷図（部分、右手が北）

図である。天保再建上屋敷絵図や後述する安政普請屋敷図の上屋敷御殿は「表」「奥」「臺所」の3棟で構成され、「奥」北側の外形線は安政普請屋敷図に酷似する。庭については註記の付箋が貼られ、「表」と「奥」の間に樹木と池らしき描写、「奥」の西側には樹木、築山、その手前に波打つ池のような描写が確認できる。

4) [安政普請屋敷図]

（220cm×265cm、図5）

安政普請屋敷図は、上屋敷（図5右半部）と下屋敷（図5左半部）を含む西高木家陣屋全域を描く。表題や年紀は無いが、【218-せ】などから、上屋敷御殿奥棟の平面が改修後であると判断でき、安政5年（1859）以降の屋敷絵図と考えられる。「床」「違棚」「押入」「畳数」のほか畳の割り付けなどが記載され間取り図の様相である。上屋敷御殿奥棟中央には家相を記した紙が貼られる。庭については天保再建上屋敷図とほぼ同規

模同内容のものが描かれるが、天保再建上屋敷図では稽古場（射場）のところまであった庭の描写が安政普請屋敷図ではない。また、御殿に面する庭が堀や矢来垣で区切られる。

5) [敷地図面] 仮番号 200711-575（図6）

西高木家陣屋は明治5年以降規模を縮小し、上屋敷御殿奥棟だけを残した御殿や下屋敷御門を曳家して屋敷を再構築する。この敷地図面はその検討図である。「元中玄関」「元臺所門」「元玄関前高堀」と、「奥向土蔵」と考えられる「土蔵」を記す。また、東側「物置」は後述する「元耕遠樓」、東南「物置」は「元稽古場」と記す。旧奥棟東側の諸室に「茶ノ間」「同庭」「臺所」への改修を計画している。

6) [敷地図面] 仮番号 200711-577（図7）

図6と同じく、明治5年以降の屋敷規模縮小に伴う検討図である。「表」「奥」と区画分けを記す。旧奥棟

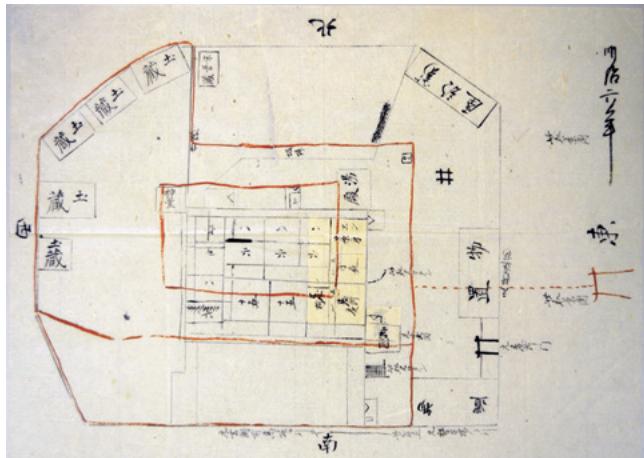


図6 [敷地図面] 仮番号 200711-575

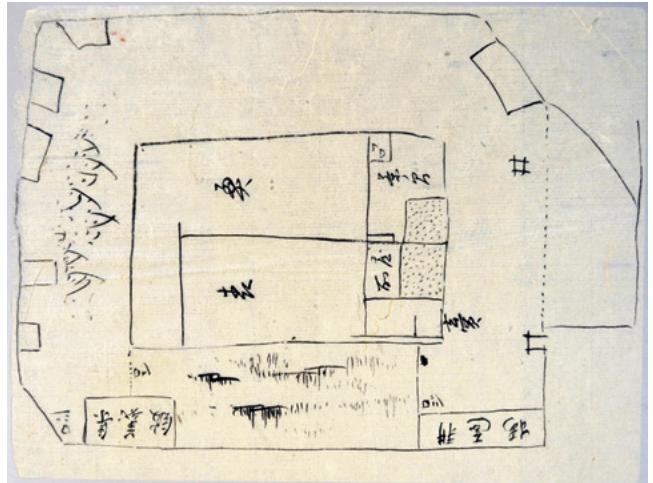


図7 [敷地図面] 仮番号 200711-577

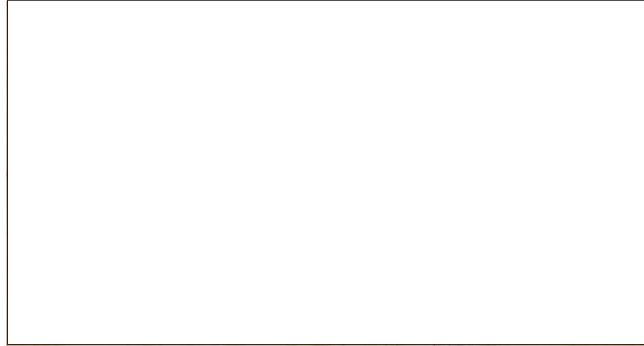


図8 筒井東【041-あ】(右手が北)

東側諸室は北より「茶ノ間」、「臺所」、「玄関」と記す。
「耕遠樓」、「集義館」(稽古場)の名もみられる。

7) 筒井東【041-あ】多良屋敷図

(113.2 cm × 58.6 cm、図8)

東高木家陣屋に関する屋敷図。表面に「文政三年之頃マテ此之通」と年紀が入る。南北に長い敷地に、主屋、二階建ての離れ、門、長屋、射小屋のほか、高塀や井戸が描かれる。方位、室名、座敷飾り、押入、畳割と畳数、柱位置、棟筋と考えられる場所に朱線が記入される。訂正部分のほか、離れの二階部分の表記に貼紙を用いる。

8) 筒井東【042】東高木屋敷図

(50.5 cm × 26.3 cm、図9)

包紙に「大正三年三月十六日仮写」と年紀が入る。長方形に近い敷地に、大正3年(1914)時点の主屋平面、土蔵、長屋の外形を描き、旧状の主屋・長屋の外形を朱筆で書き足す。旧状主屋部分の正確な規模は不明なもの、記載される「旧高書院」や「旧月見台」



図9 筒井東【042】(右手が北)

などの室名からは、景色を眺望できる室があったと想定できる。

2. 西高木家陣屋天保度上屋敷の御殿と庭園

(1) 上屋敷御殿の変遷と分析対象

西高木家陣屋の上屋敷御殿は天保3年(1832)の火災による御殿焼失を境に、大きく2つの画期に分かれます。このうち、天保3年以後の上屋敷御殿は(以下、天保度上屋敷御殿)、玄関と台所部分からなる台所棟から、座敷群と居室部分が壁や中廊下越しに2列で並ぶ表棟と奥棟が伸び、コの字型の平面を構成しました。その後、天保8年(1837)には奥棟の北に若殿様御部屋を建造し、嘉永5年(1852)には若殿様御部屋を下屋敷地に曳家し、下屋敷御殿に改修、安政4年(1857)には上屋敷御殿奥棟の北側部分などを改修している。先に述べた西高木家に関する資料6点のうち、庭園に関する情報をよく描写するのが、天保再建上屋敷図、

【218-セ】、安政普請屋敷図の3点である。これらはすべて天保度上屋敷御殿に関する資料である。そこで、ここでは西高木家の天保度上屋敷御殿に注目し、各室群の空間構成と各室群に付属する庭園がどのような関係にあるか明らかにしたい。

(2) 移徙からみる天保度上屋敷御殿の空間構成

1) 分析の対象と目的

近世では、吉事となる引越の儀式内容に日常的な利用実態が反映される。これについて、筆者の既往研究では⁶⁾、西高木家の中心的な居館であり、天保3年(1832)の類焼後、同年に再建された上屋敷御殿を対象に、再建時の引越の儀式に用いられる場所と参加者との関係から、様々な室群が、政庁、武家儀礼の場、同居する家族の生活の場としてどのように機能していたかという御殿の空間構成について分析した。

2) 移徙の手順

引越は屋敷焼失から9か月後に行われている。儀式は手順図(図10)に示す家族6名〔殿様(経貞)、奥様(於雅)と子女である若殿様(貞広)、慎之介様(貞徳)、鎮姫様、於鈴様〕と家臣たちが参加し、男性家族(m)と女性家族(f)に分かれて行われた。仮住居から御殿まで城下を移動している点は、引越が対外的な公的儀式であったことを示している。一方、参加者全員が西家に関わる身内の人間であり、家族や家臣に関するものに終始している内容からみて、儀式そのものは私的な性格を有していたことになる。

3) 御殿内の儀式

御殿内の儀式内容に注目すると、主要な儀式は、家族個々の安寧を願う熨斗献上、家臣や家族が参列する大熨斗献上という2つの祝儀と、当主と家族や家臣の対面であり、御殿の日常における利用実態が儀式の内容に反映されていることがわかる。つまり家族は女性家族と男性家族に大別され、熨斗献上の場所が家族構成員個々の日常の居所であり、家臣を含む参加者各々の社会的な位置付けが参加した儀式の場所選択に関連していることがわかる。

4) 御殿の平面構成

絵図や文献から明らかになる上屋敷御殿は、南側に建つ表棟、中庭を挟んでその北に建つ奥棟、この2棟を東側で南北に繋ぐ台所棟、3棟がコの字型に建ちな

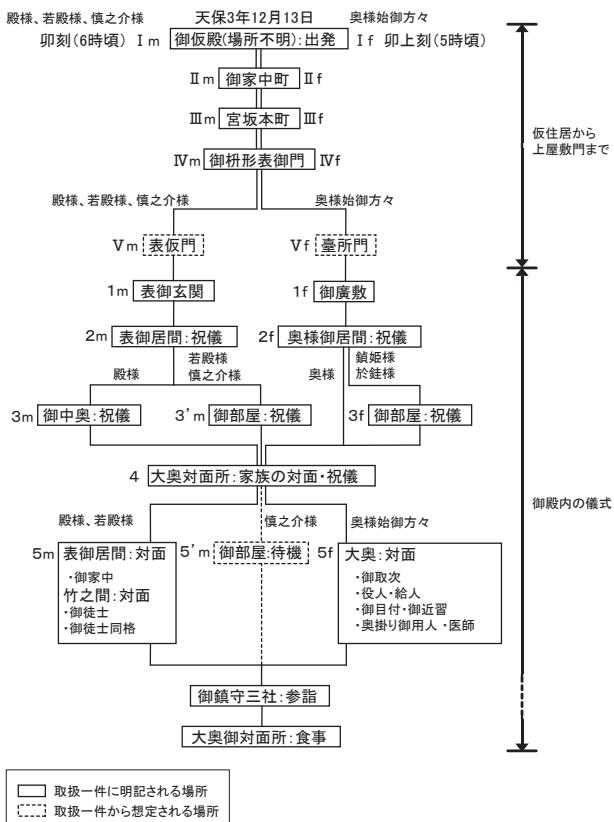


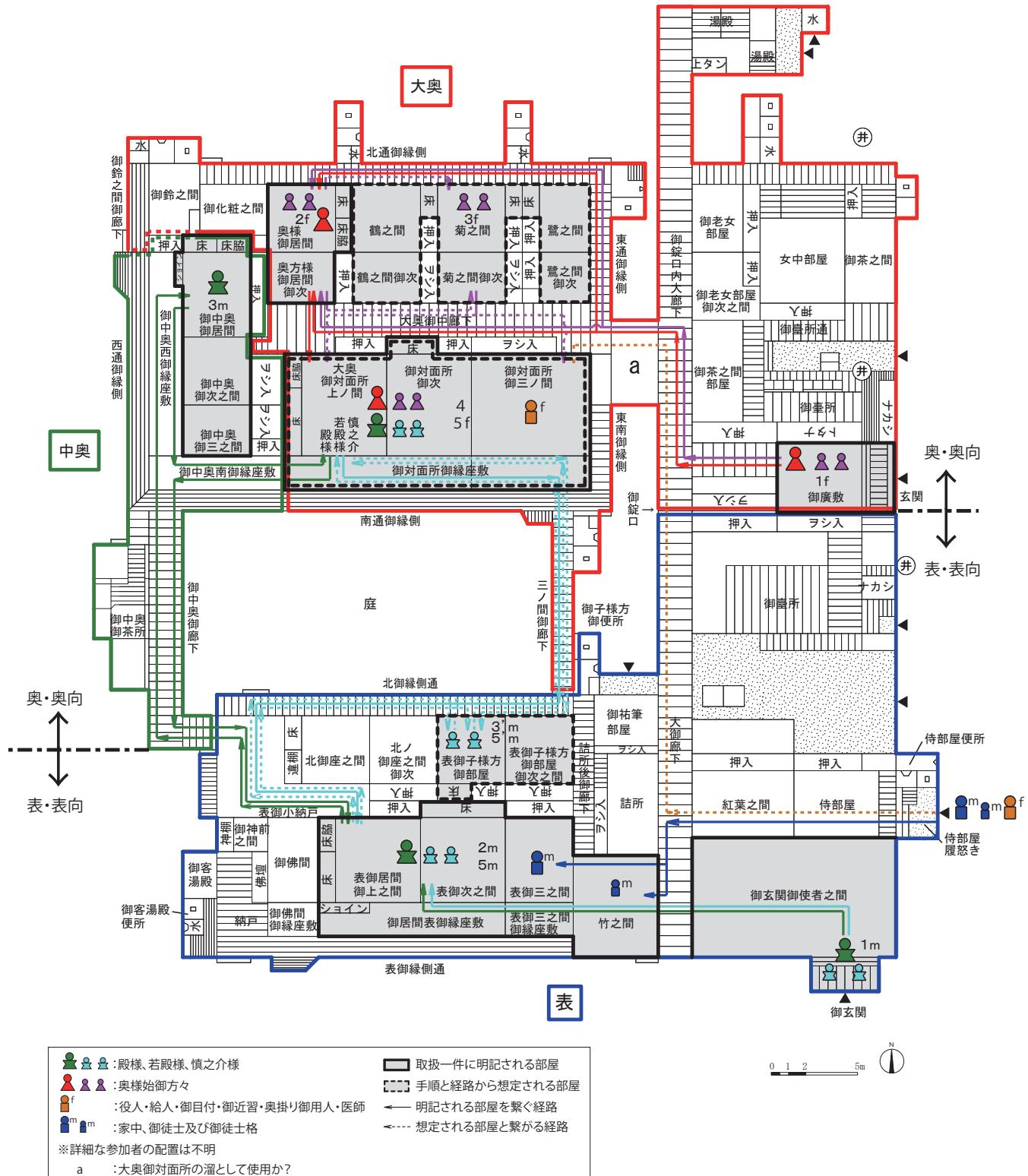
図10 仮住居から御殿までの移徙儀式

らぶ。また文献や絵図によれば、御殿全体は南半を「表」、北半を「奥」として領域的に二分されており、台所棟は表と奥に中ほどで南北に分けられていたこと、南北に3室が連なる奥棟の西半部が中奥と称されていたことがわかる。

5) 儀式が行われた場所

つぎに、引越儀式の内容と性格に着目し、儀式と建築との対応関係を天保再建上屋敷図の御殿平面図上で検討した(図11)。挙行された儀式をみると、表棟と奥棟は、いずれも南面と北面で異なる。南面では、対面、家臣列席の大熨斗献上が行われ、北面では各家族個人への熨斗献上が行われた。さらに中奥の座敷室群では殿様への熨斗献上が行われている。

このように儀式からみると、表棟・奥棟ともに機能としては南面が対面、北面が居住に対応し、奥棟の西半は殿様が占有する居住に対応していたことがわかる。また儀式が行われていない台所棟については、室名に示されるように家臣や女中たちが働く役務空間であったと判断でき、その一部に表と奥の玄関が設けられている。御殿全体は、領域としての表と奥に対応す



る形で、対面、居住、役務の3つの機能からなることが指摘できる（図12）。

6) 御殿の空間的性格

一方で、空間としてみた場合、表棟北面部分は熨斗

献上が挙行された居室となる点で私的な性格が強く、対面の場となる表棟南面とは隔てられている点が注目される。そこで、対面儀式に対応した表棟南面の表御居間、奥棟南面の大奥対面所が同様な性格の空間なの

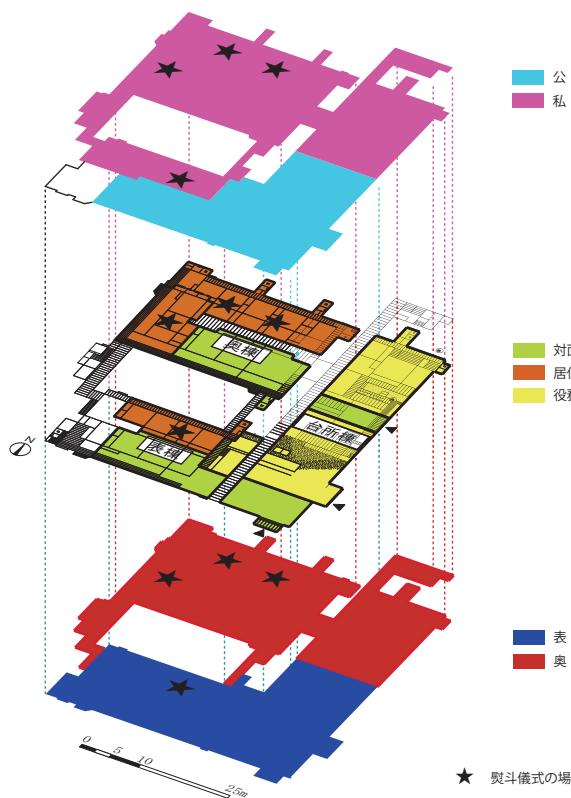


図12 天保度上屋敷御殿の空間構成

か、儀式内容と座敷飾りや天井高さとの比較から検討した。

どちらも3室が連続する平面構成であるが、表御居間ではお目見え形式の直接的な対面、大奥対面所では取り次ぎを介した間接的な対面と、両室群は対面形式で相違する。さらに座敷飾りでは、付書院を構える点で表御居間は大奥対面所より格式が高く、空間的な格を反映する天井高さも、表御居間は、現存する中奥部分より高かったと想定できる一方、大奥対面所は対面の場でありながら、居住の場である中奥より低かった。つまり両室群は、対面形式にみると空間的な性格は大きく異なっており、それが建築的実体に反映されていたことが指摘できる。この違いは、家臣との関係を持つ公の場、家族との関係を持つ私の場という、公と私の空間的な性格の違いに起因すると考えられる。

(3) 天保度上屋敷御殿の庭園

1) 表御居間・竹之間に付属する庭

表御居間は御上之間、御次之間、御三之間とそれぞれに付属する縁座敷の3室で構成され、東側にはさらに竹之間が続く。表棟の南側に位置するこれら4室に

は庭が南面し（図13）、鳥瞰図が描かれた天保8年から嘉永5年の間には、表御居間前と玄関前との空間が堀重門で区切られる。さらに安政5年頃の段階で、庭は御次之間と御三之間を境に堀で東西に区切られる。西の御上之間と御二之間に面する庭は、南面と西面を矢来垣で囲み⁷⁾、矢来垣の向こうに秋葉宮・八幡宮・稻荷宮の三社を祀る高まりがみえ、借景の役割を果たしていたとも考えられる。一方、東の御三之間と竹之間に面する庭は堀で囲まれており、堀内部で完結していたと考えられる。2つの庭の中には、天保再建上屋敷図、鳥瞰図、安政普請屋敷図をみる限り植栽等の描写はない。しかし、安政屋敷絵図には矢来垣と堀の南面に路地が存在し、安政5年頃には飛石等が設置されていたと考えられる。

2) 中奥御居間に付属する庭

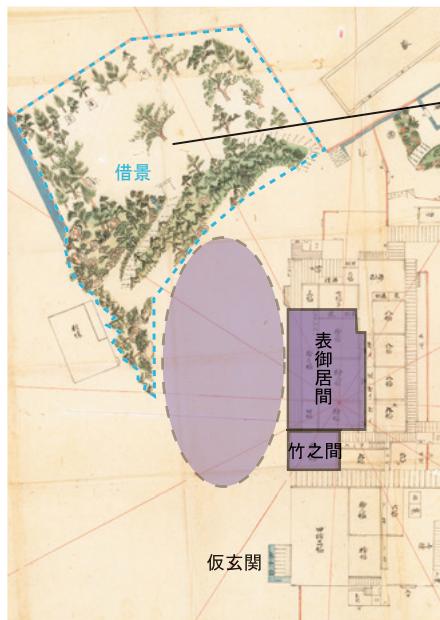
天保再建上屋敷図、【218-せ】、安政普請屋敷図には中奥御居間に面する庭が描かれる（図14）。このうち天保再建上屋敷図と安政普請屋敷図は、三社を奉る高まりと同様に、詳細な描写である。一方で【218-せ】には簡易な絵に註記の付箋が貼られる。

天保再建上屋敷図には築山の上に石組と植栽が描かれ、池などの描写はない。しかし、【218-せ】の付箋には「此所有來り庭緑水築山也 右取拂緑水築山共凡方 上者少々手廣之方ニ仕直シ 築替之事」という記述がある。つまり、天保の再建後の状態から安政の改修の間に池を造り、【218-せ】のような植栽、池、築山が揃った築山泉水庭とし、さらに安政の改修で安政普請屋敷図のように造り替えたという3段階の変遷で理解できる。また、安政の改修後の池について、安政普請屋敷図には築山の中に一部玉砂利の表現を用いた部分がある⁸⁾。この部分は池と考えられ、玉砂利を敷いた上に水を張っていた可能性が高い。

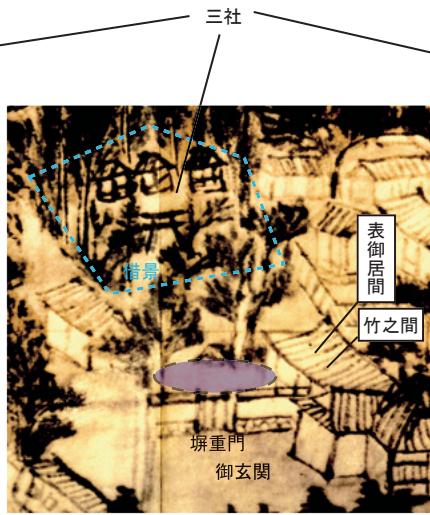
先に述べた通り、この庭園に面する中奥御居間は殿様の居住空間であった。付書院や床脇を構え、天井は大奥対面所よりも8寸6分ほど（262mm）上るなど、格式が高い⁹⁾。こうした意匠および付属する庭園からは、上屋敷御殿の中でこの中奥御居間がいかに重要な室として位置づけられていたかがわかる。

3) 大奥御対面所に付属する庭

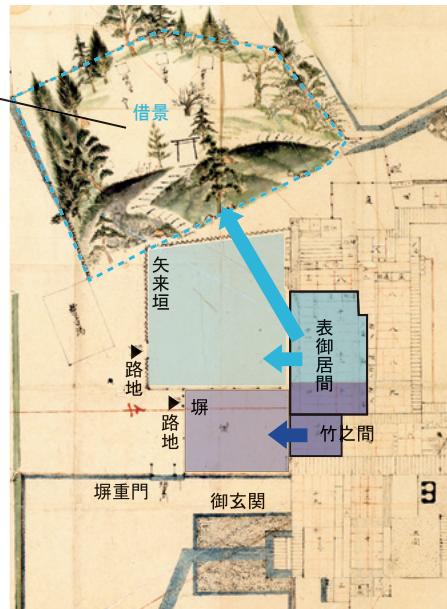
表棟と奥棟の間に位置する庭については、【218-せ】



天保再建上屋敷図



鳥瞰図



安政普請屋敷図

図13 表御居間と竹之間に付属する庭



天保再建上屋敷図

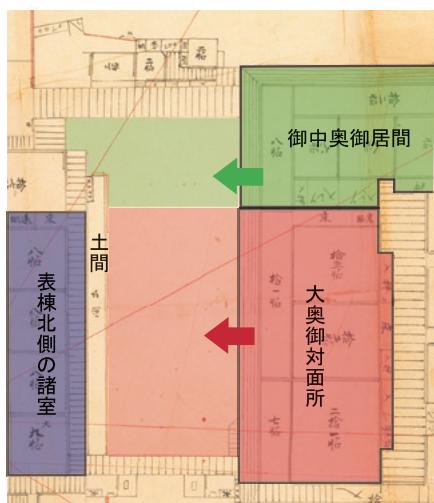


218-せ

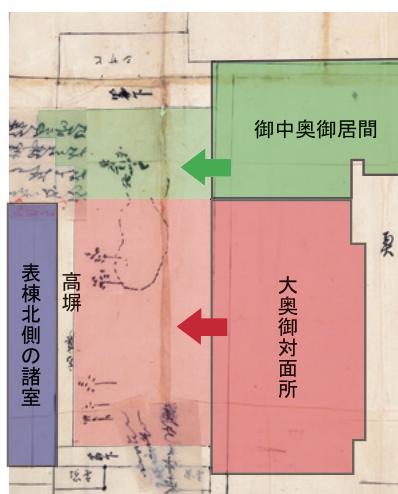


安政普請屋敷図

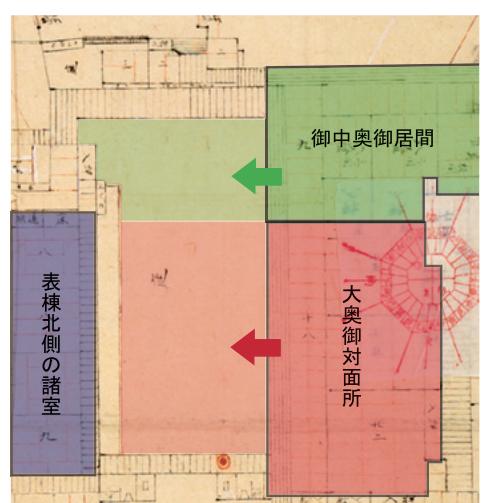
図14 中奥御居間に付属する庭



天保再建上屋敷図



218-せ



安政普請屋敷図

図15 大奥御対面所付属する庭

に唯一描写がみられる（図15）。「此所庭緑水有之 右取拂埋土之義庭ニ致度」と註記する付箋が貼られることがから、安政の改修までは【218-せ】に描かれるように植栽と池を配置していたと考えられる。その後、註記のように池を埋め立てたのであろう。

問題となるのは、この庭が表棟北側の諸室と奥棟の大奥御対面所のどちらかに、または両方に属していたのかということである。これについて、天保再建上屋敷図と安政普請屋敷図には、共通して表棟側に堀と考えられる朱線が引かれる。この堀については【218-せ】には高堀と記載がみられる。さらに天保再建上屋敷図には表棟北側の諸室と堀の間に土間と記載がある。以上から、一見中庭にみえるこの庭は、表棟北側の諸室からはみることのできない、奥棟南側の大奥御対面所に付属する庭であったことが明らかとなる。大奥対面所の次の間には庭の方を向く床が設置されており、床構えの向きにも庭との関係性が強くあらわれている。また、同じ私的空間であっても居室に用いた表棟北側の諸室よりも、対面に用いた大奥御対面所の方を重要視していたことがわかる。

4) 大奥の居室に付属する庭

奥棟の北側には、西から奥様御居間、鶴之間、菊之間、鷺之間の4室が並ぶ。これら奥棟北側の諸室には安政の改修後にそれぞれ堀で囲まれた小規模な庭が付属し、北面の堀には路地が取り付く（図16）。鳥瞰図では奥棟の北側に樹木が確認できるが、位置関係からは堀の外に位置すると考えられる。庭は飛石の設置や植

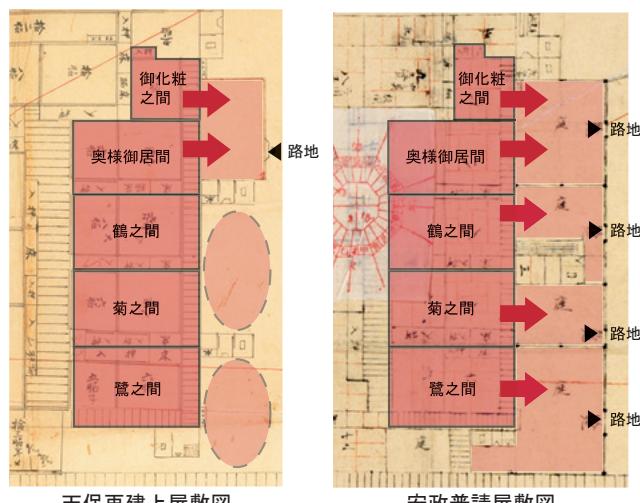


図16 大奥の居室に付属する庭

栽が想定されるが、私的性の強い生活空間の一部として用いられた可能性が強い。

3. 遊興の施設と庭園

(1) 西高木家陣屋嘉永度下屋敷にみる御殿と庭園

1) 分析の対象と目的

筆者の既往研究では¹⁰⁾、天保度上屋敷御殿と併存していた嘉永5年に造営が始まった嘉永下屋敷御殿について、平面構成や建築的な特徴を整理した上で、造営経緯や上屋敷との比較をもとに、下屋敷の施設的な性格について明らかにしている。とくに下屋敷御殿は上屋敷御殿とは異なり2階座敷の存在が明らかとなつた。以上を踏まえ、ここでは下屋敷御殿の各室と庭園の関係、そして二階座敷から眺望できる景色について考えたい。

2) 下屋敷御殿の平面構成と二階座敷の存在

まず、安政普請屋敷図と文献の分析から各室名を明らかにした上で、平面の特徴と2階の存在という建築構成の実体を明らかにした。下屋敷御殿の平面は中央を通る中廊下により、大きく東側と西側の室群に分けられる。東側は床を構える玄関と座敷が集中するのに対し、西側は土間や台所と押入のみを備える部屋では構成され、床を構える座敷は奥様御部屋の1室のみである。御殿東側には茶室を設ける数寄屋棟が廊下を介して接続される（図17）。御殿の平面は、公と私の領域区分で理解できる構成といえる。

さらに下屋敷御殿を特徴付ける建築構成として、年中行事における舗設の記載や造営に関する文献に記載された用材の分析から、複数の室群と縁座敷から構成された手摺を伴う二階座敷の存在を明らかにした。また、意匠は数寄屋風であったことも用材から指摘した。

年中行事の飾り付けについて記した文献には、懸物や生花を飾り付けた室が確認でき、いずれも床を伴い、床の存在が、対面・居住上、重要な室を性格づけていることがわかる。そして下屋敷の場合、主として東側にそのような室群が配されている。

3) 下屋敷造営の経緯

このような建築的特徴を有する下屋敷御殿の造営経緯については、上屋敷御殿の奥棟北に建てられていた若殿様御部屋を曳家し、増築した建物であることを複

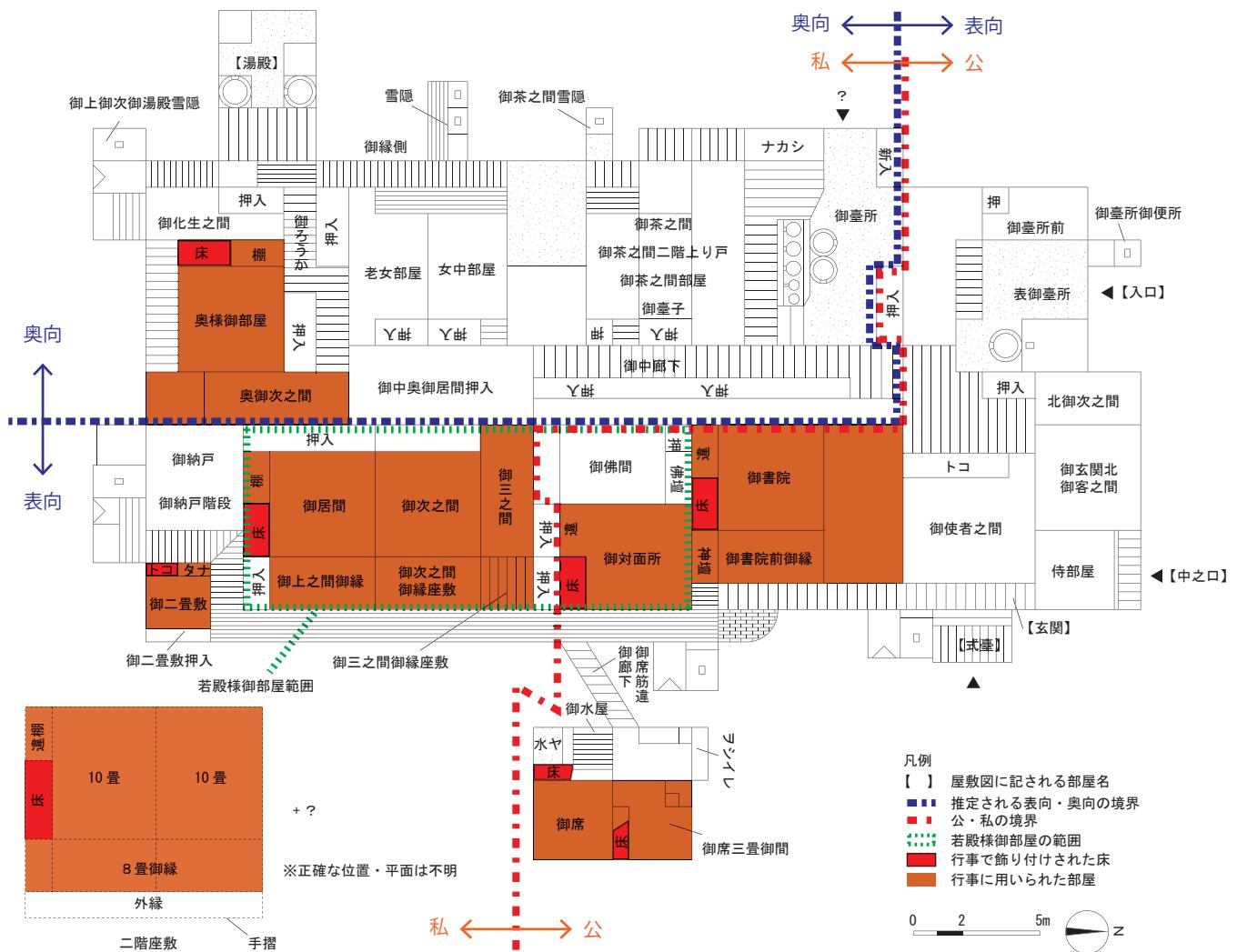


図17 嘉永度下屋敷平面図（安政5年頃）

数の文献から解明した¹¹⁾。また、江戸城での將軍初御目見えなど嫡男である若殿様の動向から、当初、下屋敷御殿が若殿様の独立に伴う居宅として計画された可能性があること、一方で平面に着目すると、奥様の居室である奥様御居間が存在しており、当時独身の若殿様に相応しないこと、居室である中奥御居間、台所など私の領域に属する機能の室群や数寄屋が充実していることから、結果、下屋敷は殿様の隠居家として造営された可能性が高いことを指摘した。

4) 下屋敷御殿の施設的性格

下屋敷御殿と上屋敷御殿の平面構成を比較すると、1棟からなる下屋敷御殿の規模は小さいものの、中廊下を有する平面が類似すること、また、室名には上屋敷御殿との共通点がみられることがわかる。以上から空間構成としては、上屋敷と同じく居住・対面・役務

の各空間から構成されていたと指摘した(図18)。一方、数寄屋風意匠の二階座敷、独立した茶室などの建築構成は、上屋敷御殿と大きく異なる下屋敷御殿の特徴といえる。隠居家に相応しい遊興の場としての性格が建築的な特徴から読み取れるとした。

そして大名家の屋敷にも多く確認できる2階建ての御殿の事例¹²⁾と比較し、2階が建てられたのは政庁の機能のない屋敷、御殿であり、下屋敷の社会的位置づけは私的な性格を有する住宅で共通すると指摘した。

5) 茶室に付属する庭

嘉永度下屋敷を描く資料は安政普請屋敷図が現状唯一である（図19）。これによると、下屋敷は上屋敷と同様、玄関左手に堀重門を配置する。堀重門を抜けると御書院に面する庭があり、そこからさらに路地を抜けると、茶室に面する庭がある。庭の奥は矢来垣に

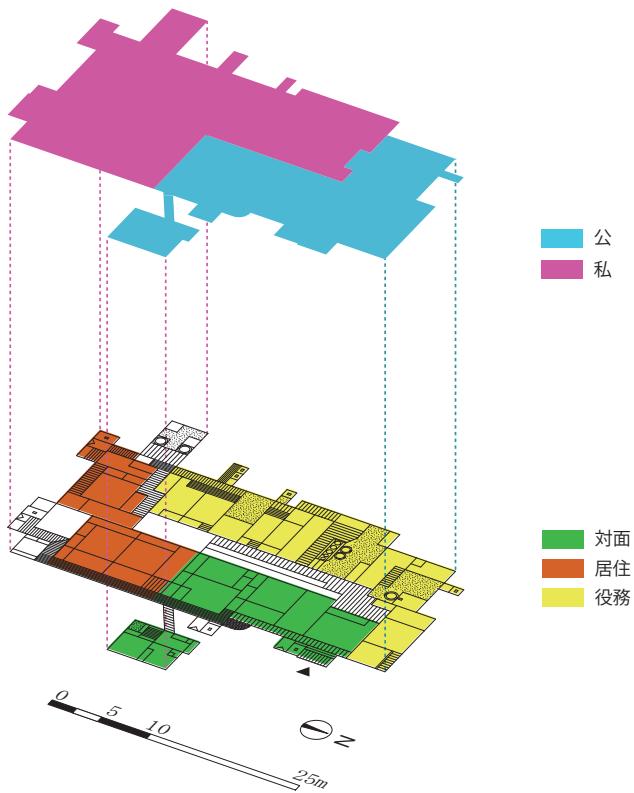


図18 嘉永度下屋敷御殿の空間構成（安政5年頃）

よって囲われており、路地はない。庭に関する詳細な描写は無いが、御書院に面する庭よりも広く、植栽や飛石が配置された数寄空間であったと想定できる。

6) 居室に付属する庭

茶室の庭の南隣には主人の居室である御居間に面する庭が位置する。茶室の庭と御居間の庭とは路地で繋がっておらず、御居間の縁側から庭に出る必要がある。御居間の庭からは鎮守と奥様御部屋前の庭に路地で繋がる。植栽や飛石などの詳細は不明であるが、御居間と奥様御居間に面する庭は下屋敷の中で大きい（図19）。一方で老女部屋と女中部屋に面する庭は、上屋敷御殿奥棟の居室部分と同様、部屋ごとに区切られ小さい（図19）。

7) 二階座敷からみえる景色

下屋敷御殿においてとくに注目できる点は、二階座敷の存在であり、景色の眺望が目的と考えられる。二階の平面は作事記録から位置と規模を想定して復原しているが、ここからみえる景色は御居間前の庭だけではなく、河岸段丘下の屋敷、伊勢街道、田畠、向かい

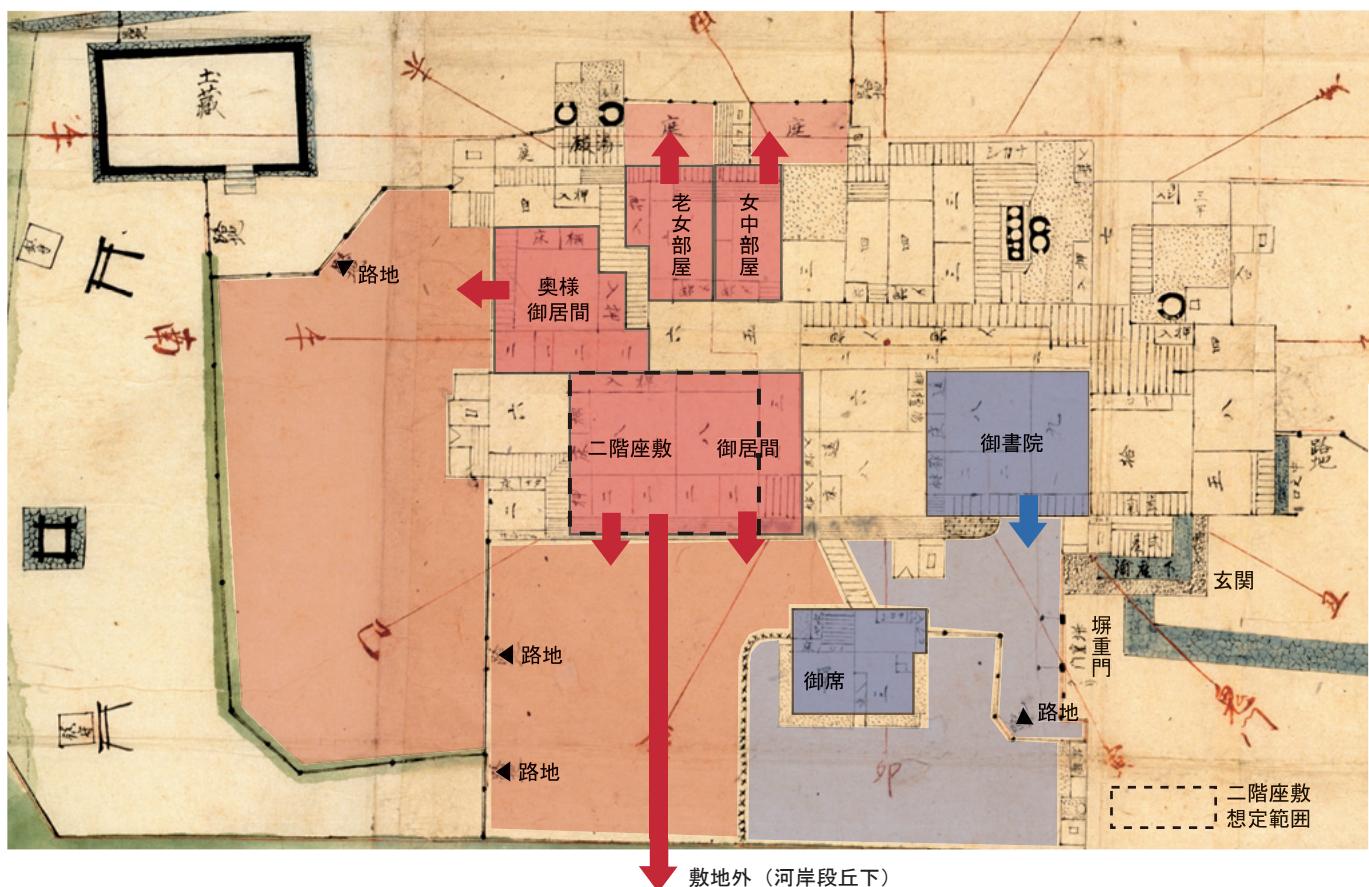


図19 下屋敷御殿の庭（右手が北）

の山々など広範囲におよぶ景色を眺望することが可能である（図19）。このことから眺望できる景色は御居間に面する庭の借景としての役割を果たしていたとも考えられる。

（2）東高木家陣屋にみる御殿と庭

1) 東高木家陣屋の御殿

筆者の既往研究では¹³⁾、東高木家の旧蔵文書のうち、屋敷絵図に注目し、文政3年（1820）から嘉永5年の屋敷地の様相と、御殿の建築的変遷を検討している。屋敷地については、敷地北部に御殿を構え、その南隣地に景雲亭という別荘を構えていたことが屋敷絵図の分析からわかれり、南北に細長い東高木家の屋敷地のうち、北側から約3分の2の様相が明らかとなつた。御殿の変遷については、享保期、文政期、天保－嘉永期、大正期以降の4つの画期が存在し、文政期と天保－嘉永期の間で、主屋が建て直されたことが明らかとなつた。これにより、文政期には下屋敷御殿とみられる離れの存在、天保－嘉永期と大正期以降の間では、玄関廻り、旧高書院、旧月見台の増改築、大正期以前には減築して御殿を再構成しつつ、近世の領域を踏襲するなど、各画期の特徴が整理できた。

2) 文政期御殿の離れと庭

先に述べたとおり、二階建ての御殿は一時期東家にも存在していたことが筒井東【041-あ】からわかる。文政期の東高木家陣屋には主屋と廊下で接続される離れが存在し、離れの周囲は竹垣で囲まれた庭が存在していた。座敷の二階からは主屋との間に位置する中庭が眺望できたと考えられる（図20）。この場合、主屋との距離感から借景などの手法を用いたとは考え難く、植栽や庭石など庭園として充実した構成であったことが想定される。

3) 高書院と月見台

筒井東【042】に描かれる通り、高書院と月見台の平面など具体的な様相は不明である。しかし、敷地東端の河岸段丘の崖際に位置している点や室名からは、眺望可能な室として構えたと考えられ（図9）、構造的には懸造で崖面に迫り出していたことも想定できる¹⁴⁾。

（3）西高木家陣屋の明月閣と耕遠樓

1) 御殿以外の眺望を目的とした施設

ここまで述べた通り、西家と東家には庭や景色を眺



図20 東高木家陣屋文政期御殿の離れと庭（右手が北）

望できる室を有する御殿が存在していた。その一方で、西高木家陣屋には嘉永度下屋敷御殿とは別に建物名や平面から眺望を目的としたと考えられる複数階建物が2棟確認できる。ここでは、これら2棟に関して整理し、どのような景色が眺望できたか想像したい。

2) 明月閣

天保再建上屋敷図と安政普請屋敷図には、西高木家陣屋の虎口南に、二階建ての建物が確認できる。また、天保3年より前の屋敷について描かれた〔屋敷図〕【47】という資料にも、同位置に朱墨で記される建物の平面、そして平面の脇には「土藏造 客館」「安永年中玄関前客家之替ニ建立」「明月閣之称有額」という記述が確認できる。建物名称、建造年代、火災に強い土藏造という建物の仕様からは、安永年間（1722～1780）建造の客館としての機能を有する「明月閣」という建物、天保3年の火災後も存在したとみることができる。建物平面については天保再建上屋敷図と安政普請屋敷図に詳しく述べ、特に安政普請屋敷図には二階平面が貼紙される。浴室なども備えた客館が、具体的に誰を招いたかは不明である一方で、南面に上る月の鑑賞を目的としていたところが、「明月閣」という扁額名から想像できる（図21）。

3) 耕遠樓

「耕遠樓」という名前の建物は、明治5年（1872）から始まる屋敷再編について検討をおこなった屋敷絵図である〔敷地図面〕仮番号200711-575（図6）と〔敷地図面〕仮番号200711-577（図7）に確認できる。旧

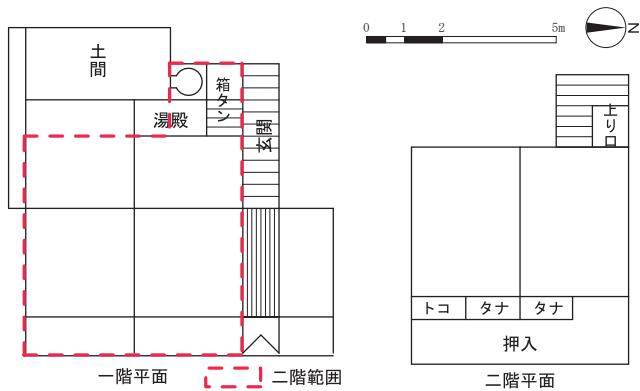


図21 明月閣平面

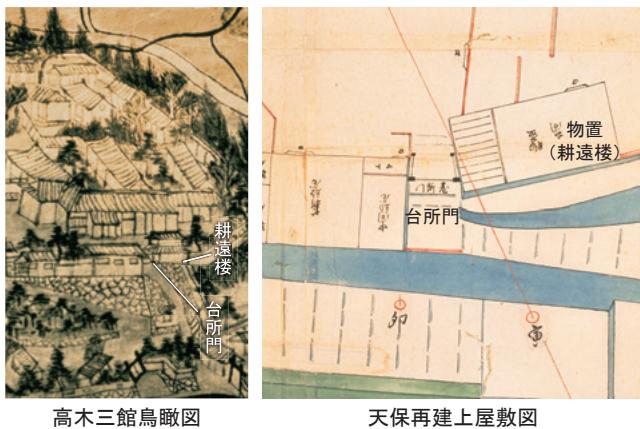


図22 耕遠樓

台所門の脇に位置したこの建物は、鳥瞰図にも同様の位置に二階建て建物の描写が確認できる（図22）。天保再建屋敷図にも同位置に「物置」として建物の間取りが描写されることから（図22）、耕遠楼は少なくとも天保再建以後から存在したと考えられる。最終的には明治の屋敷再編で取り払われた耕遠楼だが¹⁵⁾、遠くを耕すという名からは、東面に広がる河岸段丘下の風景や、向かいの養老山を眺望することができたと考えられる。

4.まとめ

本稿では、交代寄合美濃衆高木家のうち、西家と東家の陣屋に建てられた御殿や遊興施設に付属する庭園、眺望できる景色について、室群が有する建築的な空間構成との間に密接な関係があることを明らかにした。私的空间のうち主人の居室や対面をおこなう大規模な座敷には、池、築山、植栽、石組などを配置し、屋敷の中でも重要な空間に位置づけられていた。より私的な性格が強い家族の居室に面する庭については、

それぞれ塀で区切られ、閉鎖的な空間であった。また、高木家の在地の居館には遊興施設が複数存在し、地形を活かして景色が眺望できるように計画されていた。

以上、私的空间に含まれる室群の機能と面する庭園の構成は密接に結びつき、室群と庭園が一つの空間として存在していたことを明らかとした。一方、公的空間の庭については、今回分析対象とした資料から詳細な様子を把握できなかった。これについて、天保度上屋敷御殿を改修した、明治29年主屋の公的空間に属する庭の様子が発掘調査から明らかになっている¹⁶⁾。庭は飛石と植栽からなる所謂露地である。このような明治の状況も踏まえ、近世武家住宅の公的空間である表御居間に面する庭園がどのような様相であり、機能を有していたかについては今後の検討を要する。

【謝辞】

西高木家旧蔵文書の閲覧にあたっては大垣市教育委員会と名古屋大学附属図書館研究開発室、東高木家旧蔵文書の閲覧にあたっては筒井稔氏に多大な協力を賜った。記して感謝する。また、本稿は大橋の既往研究をもとに庭園に関する考察を加えたものであるが、庭園部分の成果については科学的研究費助成事業若手研究（B）（16K18223）の助成を受けたものである。

【参考文献】

- 『回遊式庭園と庭園文化 平成29年度 庭園の歴史に関する研究会 報告書』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、2018
- 伊藤信『岐阜県史跡名勝天然記念物調査報告書 第三回』岐阜県、1928
- 石川寛「高木三家文書の現状と課題－高木家文書調査報告2013－」『名古屋大学附属図書館研究年報 第11号』2014
- 大橋正浩、溝口正人、柳澤宏江「旗本西高木家陣屋の建築の変遷について 高木家文書による研究 その1」『日本建築学会東海支部研究報告書』46、2008
- 大橋正浩、溝口正人、柳澤宏江「旗本西高木家陣屋の天保再建建物の平面構成について 高木家文書による研究 その2」『日本建築学会東海支部研究報告書』46、2008
- 溝口正人編・執筆『岐阜県史跡 旗本西高木家陣屋跡 主屋等建造物 調査報告書』大垣市教育委員会、2009
- 大橋正浩、溝口正人「高木三家鳥瞰図」の分析からみる西高木家陣屋下屋敷の成立について』『日本建築学会

- 東海支部研究報告書』49、2011
- 8) 大橋正浩、溝口正人「旗本西高木家陣屋の明治初期における屋敷規模縮小について 高木家文書による研究 その3」『日本建築学会東海支部研究報告書』50、2012
 - 9) 大橋正浩、溝口正人「『天保三壬辰年 御家移ニ付取扱一件 十二月』にみる西高木家天保再建御殿の空間構成 高木家文書による研究 その4」『日本建築学会大会学術講演梗概集』東海、2012
 - 10) 大橋正浩、溝口正人「西高木家陣屋 嘉永度下屋敷御殿の建築的性格について 高木家文書による研究 その5」『日本建築学会大会学術講演梗概集』2013（建築歴史・意匠）、2013
 - 11) 大橋正浩、溝口正人「再建後の移徙からみる西高木家陣屋天保度上屋敷御殿の空間構成について」『日本建築学会計画系論文集』79 (705)、2014
 - 12) 大橋正浩「西高木家陣屋に関する新出絵図2点について」『日本建築学会技術報告集』21-47、2015
 - 13) 大橋正浩『西高木家陣屋御殿にみる近世武家住宅の公と私の構成』名古屋市立大学（学位論文）、2017
 - 14) 大橋正浩「屋敷絵図にみる旗本東高木家陣屋の様相と建築的変遷—東高木家旧蔵文書による研究」『日本建築学会東海支部研究報告集』57、2019
 - 15) 『新修上石津町史』上石津町教育委員会、2004
 - 16) 小野健吉『岩波日本庭園辞典』岩波書店、2004
 - 17) 『特別史跡 名護屋城並びに陣跡 古田織部陣跡発掘調査概報2』佐賀県教育委員会、1992
 - 18) 『特別史跡 名護屋城並びに陣跡 前田利家陣跡』佐賀県立名護屋城博物館、2008
 - 19) 『特別史跡 名護屋城並びに陣跡 名護屋城－山里丸I－』佐賀県立名護屋城博物館、2014
 - 20) 宮崎博司「肥前名護屋の庭園遺構について」『研究紀要第21集』佐賀県名護屋城博物館、2015
 - 21) 『特別史跡 名護屋城並びに陣跡 名護屋城－本丸御殿跡I－』佐賀県名護屋城博物館、2016
 - 22) 『岐阜県史跡 旗本西高木家陣屋跡－測量調査・発掘調査報告書一』大垣市教育委員会、2013
 - 23) 『史跡 西高木家陣屋跡 保存活用計画書』大垣市教育委員会、2018

【註】

- 1) 参考文献1を参照。回遊式庭園に関する論点として、様式の成立、様式的特徴の展開などがあがる。
- 2) 参考文献4から14を参照。
- 3) 参考文献12、13のpp41-44、pp53-54を参照。
- 4) 参考文献15に所収。
- 5) 名古屋大附属図書館所蔵の『高木家文書』および関係

する資料群については研究開発室による整理番号が付けられる。

- 6) 参考文献9、11、13のpp33-54を参照。
- 7) 安政屋敷絵図の描写では「×」が連続して描かれている。用材を×に組み合わせて垣を造ることから、竹を×に組み合わせる矢来垣と判断した。
- 8) 安政屋敷絵図には白洲や玄関前に玉砂利の表現が見受けられる。これと同じ表現が庭園内的一部に用いられていたことから、玉砂利が用いられたと判断した。
- 9) 参考文献13のpp37-38を参照。
- 10) 参考文献7、10、13のpp77-97を参照。
- 11) 参考文献7、10、13のpp81-84を参照。
- 12) 参考文献13のpp84-87を参照。二階建ての御殿の事例には、名古屋城御深井丸新御殿〔文久3年(1863)造営〕、金沢城巽御殿〔文久3年(1863)造営〕、富山城千歳御殿〔嘉永元年(1848)造営〕、松代城新御殿〔元治元年(1864)造営〕などがある。先代の殿様や奥様の隠居家などに使用された。
- 13) 参考文献14を参照。
- 14) 長野県飯田市には高木家と同じく交代寄合衆であった信濃衆小笠原家の御殿が国指定の重要文化財小笠原家住宅として現存し、御殿は敷地南面の斜面に懸造で迫り出す構造となっている。
- 15) 参考文献13のpp57-73を参照。
- 16) 参考文献22のpp39-45を参照。

【図版出典】

- 図2・13・14・15・16・22右 天保再建上屋敷図（高木家文書、名古屋大学附属図書館所蔵）
- 図3・13・22左 高木三館鳥瞰図（高木久子氏所蔵）
- 図4・14・15 〔屋敷図〕218-せ（高木家文書、名古屋大学附属図書館所蔵）
- 図5・14・15・16・19 安政普請屋敷図（西高木家文書、大垣市教育委員会所蔵）
- 図6 〔敷地図面〕200711-575（高木家文書、名古屋大学附属図書館所蔵）
- 図7 〔敷地図面〕200711-577（高木家文書、名古屋大学附属図書館所蔵）
- 図8・20 筒井東【041-あ】（筒井稔氏所蔵東高木家文書）
- 図9 筒井東42（筒井稔氏所蔵東高木家文書）